

第1部

北山恒氏プレゼンテーション「In Between パブリック・プライベート」



プロフィール |

北山恒（建築家 | architecture WORKSHOP 代表、法政大学教授）

1950 年生まれ。横浜国立大学大学院在学中にワークショップ設立（共同主宰）、1995 年 architecture WORKSHOP 設立主宰。横浜国立大学大学院 Y-GSA 教授を経て、2016 年法政大学教授。横浜市都心臨海部・インナーハーバー整備構想、横浜駅地区大改造計画に参画。2010 年第 12 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館コミッショナー。受賞歴に、日本建築学会作品賞、ARCASIA 建築賞ゴールドメダルなど。著書に『TOKYO METABOLIZING』、『都市のエージェントはだれなのか』（TOTO 出版）など。

今日は、「In Between パブリック・プライベート」いうタイトルで、公領域と私領域、公共的なものと私的なものの間について、考えているいろいろなことをお話しします（図 1）。

人間というのは、動物の縄張りと同じように、泡の中にいるというような感覚があります。エドワード・ホール（1914-2009）という社会学者が、プロクセミックスとって、人はこういう 3m ぐらいの泡の中にいて、それが移動していると唱えました（図 2）。今日のみなさんは、泡がぶつかっていて、自分の縄張りの中に他者がいる状態です。このように、自分以外のものということを認識することで、初めて自己が確立する（図 3）。この泡の中に他人が来ると、「いやだな」と感覚的に感じる。親しい人がそばにいるときには気にならなくても、見知らぬ人がいると緊張しているはずなんです。

ところが、近くに人がいない状態、大自然の中に人間がいると、そういう縄張りの感覚というのが溶けて、環境の中に自分の意識が溶けていく感覚をもちます（図 4）。哲学者のマルティン・ハイデガー（1889-1976）は、空間と人間の関係というのは「住まうこと」であるという。彼は、人間とは死すべきものであって、人が消えてもモノとしての建築は残っていくと言います。つまり、空間のほうが優位性を持っている。ハイデガーにとっては、空間の中に人間の自意識が溶けて空間と同一化することが、不思議な発見だったようです。これは「生きられた家」という概念です（図 5）。ハイデガーは、空間そのものが人間の意識を吸収してしまうことがあるという発見をしました。

ハイデガーの弟子だったハンナ・アーレント（1906-1975）は、その考えをさらに進めました。人工的な環境、これは都市や集落とも言えますが、そういった都市空間の中に政治的な空間を作っていくと、人間が都市空間によって政治的にコントロールされる、と書いています。実は、私たちの、縄張りのような環境に対する感覚と、実際にある都市空間が、公的領域と私的領域を決めている。このチ・カ・ホで言いますと、真ん中の歩いているところは公的領域で、柱の内側は私的領域のようにも見える。だけど、実はここは公的領域ですから、私的領域と公的領域が混ざっているような状態にあると言えます。それは人間の縄張り感覚が、本能的に「これは公的領域だ」「これは私的領域だ」と、サインとして与えているのです。

この泡のような個体距離に他人が侵入してくると、人は危険を感じるわけですが、泡の外にあっても、視線が交わるととても緊張します（図 6）。でも、そのときに挨拶をすることで、お互いに敵意がないことを示し合います（図 7）。この、目が合って挨拶をする関係を、ネイバーフッドと呼ぶのです（図 8）。つまり、近隣やコミュニティといったものは、目を合



図 1

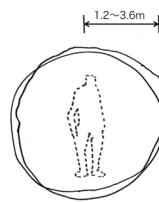


図 2：泡のなかの個体



図 3：近代的自我

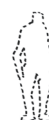


図 4：無意識でいると人は環境に溶ける



図 5：人間は囲まれた空間に同定される

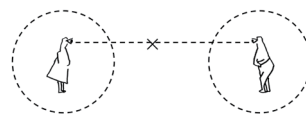


図 6：視線の交差

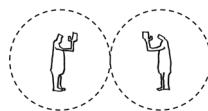


図 7：挨拶

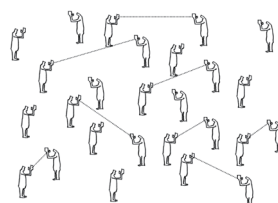


図 8：neighborhoods 目を合わせ挨拶する関係

わせて挨拶をする関係にある人間たちのまとまりと言えます。もともとは、人は挨拶をしていました。今でも田舎に行ったり、小さな集落に行ったりすると、知らない人が来ると挨拶してくれます。ところがこのチ・カ・ホを歩いている人で、挨拶する人は誰もいません。挨拶とは、基本的には知っている人同士の間で行われるからです。

これとは別に、人間は10人ぐらいのスケールでいると一番共同体としてうまくいく、意思が統一できると言われています（図9）。サッカーは11人ですし、ラグビーは15人をフォワードとバックスに分けて7名と8名でやる。面白いのは、サッカーやラグビー、アメリカンフットボールといった、フィールドで行うゲームのコートが、大体50mとか100mぐらいであることです。このスケールは、人間がお互いに身体的なコンタクトをとりながらいられるサイズなのだそうです。

そもそも人間が個体認識できる数は150人ぐらいだと言われています（図10）。原始集落を調べても、大体このくらいの数で構成される集落が多いようです。すると、150人ぐらいの人間が集まっている集落がネイバーフッドであると定義ができると言えます。昔の日本にも入会地というものがありましたが、ネイバーフッドという集合は「コモンズ」という共有地によって支えられていました。みんなで使う空地みたいなものです（図11）。

これは、レヴィ=ストロース（1908-2009）という文化人類学者が描いたダイアグラムです（図12）。左側がアマゾンの先住民の環状集落です。大体どの原始集落もこういった輪を描いて住むらしい。右側にあるのは、キリスト教が入植して作った植民都市で、スクエアな形をしています。真ん中に四角い広場をもって、グリッド状に土地を分けていく。ギリシャの植民都市もみんな同じこういうグリッド状です。原始集落、コミュニティ、ネイバーフッドといった150人ぐらいのスケールで生きている人間の集団と、大体1000～3000人規模と言われている植民都市は、人間の収容力という点において、大きく異なる都市のダイアグラムです。

原始集落というのは直径が100mぐらいの円環を持っていて、大体150人ぐらいの人間が住んでいたようです（図13）。環状集落の大きさはちょうどサッカーグラウンドが入るくらいです（図14）。この大きさが、人間がネットワークを組みながら、身体言語でコミュニケーションできる空間のスケールなんじゃないかと思えます。そして、原始集落は円環状になっていることが重要です。お父さんとお母さんがいて、子供がいておばあちゃんがいる、家族には多様な構成員がいて、それぞれの役割をもっています。それは実は非常に不平等な関係で、だけど、全員がお互いに顔見知りで排除される人はいない。だからこそ、子供や身体に障害のある人、高齢者はケアされます。これが原始集落の形です。つまり、150人ぐらいの集まりにそれぞれ役割が与えられていて、それをまるで演劇のように毎日こなしていくのが、原始集落の日常なのです。

対して、イエズス会が作った植民都市が完全にスクエアな形をしているのは、平等という概念が導入されているからです（図15）。環状集落でみんながお互いに顔見知りである状態というのは、不平等です。ところが、1000～3000人規模になると、見知らぬ人が集まって住むことになるので、お互いが平等になる。これを、グリッドが保証していく。平等と公平性というのは実は都市空間が表しているのです。先ほどのハンナ・アーレントの話に戻ると、私たちが政治的にどういう状態に置かれているかを、都市空間が示していると言えます。イエズス会が入植すると、先住民のインディオの人たちを改宗させていくために、円環・環状集落からグリッド状の街に移り住ませます。すると、彼らの固有の生き方や日常生活が消去され、簡単に改宗させられてしまう。レヴィ=ストロースの『悲しき熱帯』¹⁾には、都市空間が人を改宗させる道具でもあったとあります。

このように、真ん中に100m角の広場があって、中に十字架がオブジェのようにあります（図16）。その周りに、兵舎のようにグリッド状の住宅が広がります。この様子は東日本大震災後に建てられた仮設住宅にも近いですね。完全に平等です。近代が作り出した都市概念とは、こういう平等な概念をも作り出したのです。

これは私が実際にアマゾンの奥地に行ったときの写真です（図17）。真ん中に十字架が立っている木造の大きな教会で、それ自体が世界遺産になっている見ごたえのあるものです。これが建てられたのは16世紀末ですが、この頃の大航海時代に、ヨーロッパ文明が作った都市のモデルが世界中に広がり、ヨーロッパ世界の都市概念というものが世界に浸透しました。

日本には、このような都市概念はなかったんじゃないかと思えます。アジアは農耕が基本です。ですから、都市というのは実は政治的なもので、本当に生活をしている場所ではなかったのではないかと考えています。



図9：10人の集合



図10：150人の集合



図11：neighborhoodsはcommonsを監理する

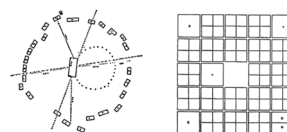


図12：レヴィ=ストロースのダイアグラム

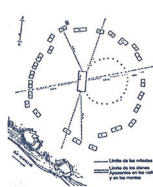


図13：環状集落

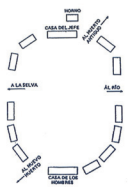


図14：環状集落

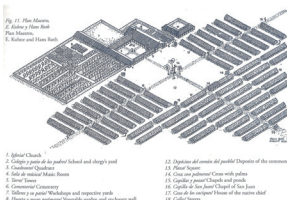


図15：植民都市

図16

都市が作られる中で、パブリックという公的概念が作られていきます。コミュニティや集落の対の言葉として、都市があります。そして、都市には交易、つまり市場があります。ということかと言うと、実は 10 人ぐらいの顔見知りの中だけで交易をしても、経済活動は生まれません。見知らぬ人が来たときに、初めてそこで交易が始まるのです。そして、市場が形成されることが、都市を作っていく。これに対抗するものとして、共有で使うもの、つまりコモンズがあります（図 18）。ですから、資本主義はコモンズを消去していきます。コモンズというのは経済活動を利するものではないのです。

これは、昔の市場の跡です（図 19）。市場の遺跡は大体半径が 200m の円がでてきます。で、この中に大体 3000 人ぐらいの人間が入って、古代の市が開かれるそうです。3m ぐらいの高さの土塁が周りを囲っていて、真ん中に小山があります。土塁には中で市場を開いているときに盗賊やズルを見張るための監視員が立っていたと言われていて、このような管理人が置かれることで、市場というアクティビティが始まったと言われています。

現代社会は、Public（官） Commons（共）、Private（私）、Market（民）という 4 つのセクターによって囲われていると言えます（図 20）。上野千鶴子さんはパブリックを「公」ではなく「官」と書きます。プライベートが「私」で、上野さんはコモンズを「協」と入っていますが、私は、共同の「共」のほうが近いんじゃないかと考えています。マーケットは「民」です（図 21）。上野さんはプライベートとマーケットを「プライベートセクター」と言って、パブリックとコモンズを「パブリックセクター」と書いています。私はそれとはちょっと違って、見知らぬ人が参加する集合体には、必ずパブリックという概念を入れないとコントロールできないから、都市がパブリックを要求すると考えています。ある意味、人々をコントロールする道具として使われるものがパブリックである。同時に、マーケットはパブリックになる都市を支えるための道具ですから、マーケットがパブリックと近い状態にある。コモンズというのは、共有するものですから、私的なものを共有している状態で、プライベートとコモンズは結構近いんじゃないかと思っています。

このチ・カ・ホもそうですが、都市とは目を合わせない関係です（図 22）。お互いに顔を見ない人間が集まっているのが都市です。ですから、私たちは集落から都市の中に移り住んだ状態なのです。

人々は、自由な空間、自由な表れ、個人が自由であるという考えに基づいて、この社会を作っているわけですが、それはヨーロッパ社会が獲得した都市概念だったと考えられます（図 23）。知らない人間が集まる場所である公共空間では、突然犯罪が起こる可能性があるし、すると監視することが必要になってきます。監視される空間が、都市には要求されるのです（図 24）。これが、パブリックです。パブリックというのは平等と自由を保証される代わりに、監視されることが同時に並存しているのです。ミシェル・フーコー（1926-1984）は、放射状になっている牢屋の真ん中に監視人がいて、なるべく少ない人数で監視できる一望監視システム、「パノプティコン」という空間装置を紹介しています（図 25）。

これはパリの航空写真です（図 26）。パリは放射状になっていて、都市を監視するために作られています。ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）もそう書いていますし、ジークフリート・ギーディオ（1888-1968）の『時間・空間・建築』¹²という大著にもジョルジュ・オスマン（1809-1891）のパリの都市計画は、反乱軍を鎮圧するために考えられたと書かれています。ここを見ると、ブルバールという大通りが、昔の街区をぶった切つ



図 17



図 18

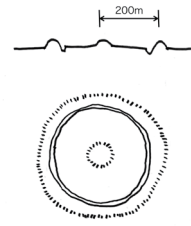


図 19：円形広場＝市場遺跡
監視のマウンド

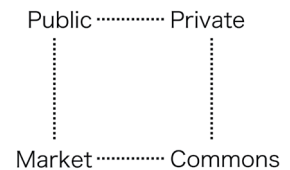


図 20

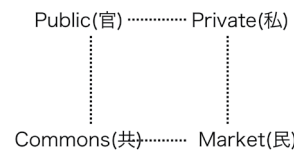


図 21

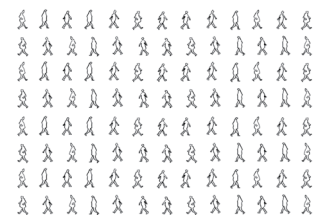


図 22：都市
目を合わせない関係

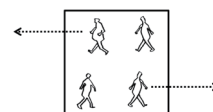


図 23：自由な現れの空間が公共空間である



図 24：都市は監視が要求される
＝（宗教）パノプティコン

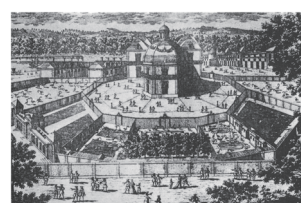


図 25：パノプティコン



図 26

て入っているのがわかると思います。オスマンは、1853年から1870年のたった17年間で、街区にブルバールを差し込むことで、パリの街を切り刻みました。そして、軍隊が派遣しやすい都市を作ったのです。

パリの街は、どこに行ってもみんな同じ建物の壁があります。これが、オスマンファサードと言われている都市立面です（図27）。パリの街を、ケーキにナイフをいれるようにカットして大通りを作り、その断面に同じファサードを入れていく。この、ブルバール沿いのオスマンファサードという立面によって、私的空間と公的空間は綺麗に切り分けられています。このブルバールはそこにいる人が突然機関銃で撃たれてもしょうがない場所です。公共空間というのはそういう空間なんです。そして、壁一枚隔てた中に入ると、プライベートの空間になっていて、そこは個人の自由が確保されています。個人とプライベートとパブリックという概念は、おそらくヨーロッパ以外の社会は持っていなかった感覚です。私たちはもっと曖昧な、パブリックとプライベートがシームレスに連続する空間を感じているのですが、ヨーロッパ社会では、公私が明確に切り分けられた空間として認識されています。

これは、18世紀半ばに描かれたノリの地図という、ローマの地図です（図28）。白い部分がパブリックで、黒い部分がプライベートです。面白いのは、教会の中が白くなっていることです。内部空間でも、パブリックだから白く塗るんですね。白い空間と黒い空間は、ちょうど同じぐらいの面積比で、しかも複雑に絡み合っている。これが中世のヨーロッパのすごく快適な住まい方だったんです。パブリックとプライベートが密接にコンタクトしていた状態で住んでいました。

右側にあるのは、1920年頃にル・コルビュジエ（1887-1965）が描いた都市を白黒図に落としたものです（図29）。コルビュジエは20世紀の人ですから、ほとんどが白＝パブリックです。そこにフリースタンディングオブジェと呼ばれる自立している黒い建物＝プライベートが建っている姿が、彼が思い描いた未来都市です。白と黒、すなわちプライベートとパブリックが複雑に絡み合っている状態が、20世紀に入ると白＝パブリックを勝たせてしまう。コルビュジエは、管理を強くした空間を未来都市として描いたのです。

これは、コルビュジエが設計した、サヴォア邸という有名な住宅です（図30）。これも建物の周りに何もありません。家が自立して、周りとは関係なくポンと置かれている。近代になって、こういうアイコニックな建築が作られます。このように建物が単体で自立することが、20世紀ヨーロッパの発明だったのです。

これはニューヨークの航空写真ですが、この都市はフリースタンディングオブジェの集合体です（図31）。単体の建物が集合した都市の発明は、19世紀末のシカゴから始まり、20世紀になると、多くの都市がそうなります。札幌もそうですし、東京もビルが個別に建っている状態の都市です。現在のアジアの多くの都市はこれと同じようになりつつあります。20世紀に発明された近代型の都市が、当たり前の都市空間になったのです（図32）。

1924年に、ルートヴィヒ・ヒルベルザイマー（1885-1967）が未来のユートピア都市として、このようなドローイングを描いています（図33）。当時、このようなものはどこにも存在していませんでしたが、その後、団地などでリアライズされるのです。こういう都市は、本当に人々を幸せにするのでしょうか。

現在の日本では、こういった郊外住宅地という単体の家族のための住宅と、大規模出資のビルが集積しているものの二つの都市風景で構成されています（図34）。

今も建設ラッシュが続いているタワーマンションという不動産商品は、2001年に小泉内閣が、30mを超えたマンションを作ってもよいと法改正をしてから、たくさん建てられるようになりました（図35）。つまり、金儲けの道具として住宅が作られる状況の中に、私たちは住んでいるのです。



図 27

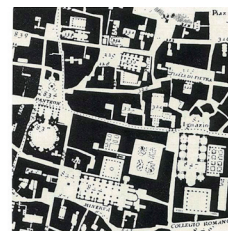


図 28



図 29 : Colin Rowe, Fred Koetter, *Collage City*, 1978



図 30 : VILLA SAVOYE / LE CORBUSIER



図 31 : City of Capitalism



図 32

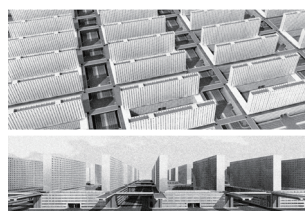


図 33 : Skyscraper City 1924 ヒルベルザイマー



図 34 : 郊外住宅地 / 都市中心

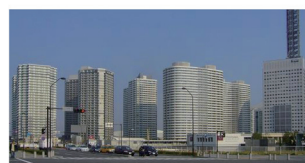


図 35 : タワーマンションという不動産商品

2010年のヴェネチア・ビエンナーレで、この状況は何かがおかしいというようなことをプレゼンテーションしました。会場の一番右側が入口で、入るとすぐに、パリの航空写真、その隣にニューヨークの航空写真を展示しました（図36）。一番左側には、東京の航空写真をアニメーションにして展示しました。そして、同時代の都市の形態はまったく異なることを示し、その異なる都市形態の中に私たちは住み、その都市にはどういう違いがあるのか。世界中が、公共・パブリックという管理の中に生き、マーケット、経済活動の中に私たちの実生活が取りこまれてしまっていることを提示したのです。

この展示の会場は、ベネチアにある日本館という、日本政府が持っているパビリオンでした。その建物の外壁に、赤い文字で「都市の公共空間は人々を抑圧する権力装置である」と書きました（図37, 38）。そうしたら、これを運営事務局が問題視して、すぐ白くペンキで塗り直せと言われたんです。結果的に、「Urban Public Space」という単語にクォーテーション（"）を入れて、カッコ付きにすることで残すことができました。ですが、ヨーロッパの人たちにとっては、「都市の公共空間が市民を抑圧する権力装置だ」なんて、とんでもない話なんです。ヨーロッパ世界では、広場というのは勝ち取ったものだという自負があるし、そこで民主主義を運営していると考えているからです。でも、私はそうではないと思います。パリを見てもやはり都市は抑圧空間であると思います。

私たちはプライバシーを守ることがとても大事であるように思っているけれど、ハンナ・アーレントの著作『人間の条件』^{*3}に、実はプライベートとは、人から見られる権利を奪われている状態である、隔離されているんだとあります（図39, 40）。つまり、孤立するということです。ですから、プライベートというのは、近代都市社会が生んだ、ある意味では病気ではないかと思っています。

初めの方に話した、原始集落の人間が150人ぐらいのスケールであったこともそうですが、人間には本来のコミュニティ・スケールというものがあるのではないかと。それが実は「コモニング」、みんなが一緒にいるという感覚を掴めるような装置なのではないかと考えています（図41）。

ところが、近代以降、ヨーロッパ文明は「コモン」を排除してきました（図42）^{*4}。何故かという、マーケットとコモンズというのは対立概念だからです。資本主義を上手く運用するためには、コモンズを全部切り刻まないとはいけない。「コモンズの悲劇」という言葉が経済学にはあります。これは、イギリスで「コモンズ」という羊のための牧草地をみんなで共有して持つことをしたら、力のあるものが羊をたくさん連れてきて、草を全部食べちゃった。結局は、競争の原理が働いているところではコモンズは成り立たないという経済学の報告です。

では、いったい今我々には何ができるのでしょうか。これは、東京工業大学の塚本由晴さんが提案している「コモナリティーズ」^{*5}というアイデアです（図43）。これは、実体としての空間ではなくて、突然都市の中に蜃気楼のように現れる共有地を大事にしようというものです。

たとえば、地域のお祭りとか、桜の花見をするときなどがそうです。花見のときは、みんなが一緒になったコモンズの概念が生まれている（図44）。昔は、みんな持っていた感覚が、ここで生まれると書いています。

こちらは乾久美子さんの『小さな風景からの学び』^{*6}という展覧会と書籍での提案です（図45）。彼女は、都市の中にある、何でもない空き地のような所有の不明快なもの、それらに未来の都市に重要な宝物があるのだと考え、所有の不明快な空間を調べて、写真を撮りため、展覧会をやりました（図46）。このように、コモンズが消えても、コモナリティー、コモ

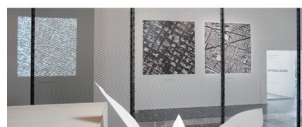


図 36



図 37

Urban public spaces are authoritarian devices for suppressing people.

図 38

「private」ということは、他者によって見られ、聞かれるという経験から生まれるリアリティを奪われていることを意味する。私的な生から奪われているのは、他者の存在である。」

ハンナ・アーレント『人間の条件』

図 39



図 40：プライベートとは他者の視線を奪われている状態である

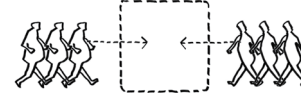


図 41：誰でも参加できるコモニング

近代国家の形成にともなう、長い歴史的過程を経て発展してきた入会制をはじめとする、自由環境の管理・維持にかなうる優れた制度（コモンズ）は、法制度、社会的、あるいは経済的な観点から、前近代的、非効率なものとして排除されていった。

宇沢弘文『社会的共済制度』

図 42

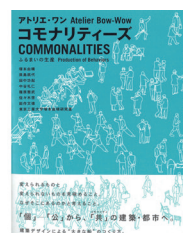


図 43



図 44



図 45

ニングといった共有感覚を生み出すような場所が大切なのではないかと考えています。

これはパリの APUR による都市計画です（図 47）。パリは、パブリックとプライベートを切り分けて、公共の場所を管理空間として使っているんですけど、それをパリの行政が主導する都市計画オフィスが、オスマンファサードを切り崩して、共有地を作り出すことを始めています。この計画図が、花見の写真と似ているので面白い（図 48）。こういった誰でも入れるような空地をどう使うのか。これが外部空間であることがすごく大事です。

東日本大震災の後に、建築家たちが「みんなの家」というプロジェクトを始めました。これは、英語だと「House for All」というタイトルです。誰のものでもないけども、みんなのものであるというそういうもの、それこそ commons なんですね。

これは西沢立衛さんが設計した豊島美術館です（図 49）。この空間の中に入ると涙が出てくるような、感動をおぼえます。ただのコンクリートのシェル、洞窟みたいな空間なのに、なぜ感動するのか。実は commons を誘発する空間スケールなんじゃないかと思っています。ちょうど、原始集落の大きさのような円環状の空間があって、なにか守られているような感覚がする。これは私が勝手に思っているのですが、我々が持っている共同体のスケールというものは、この中にいると呼び戻されるのではないかと考えています。



図 46

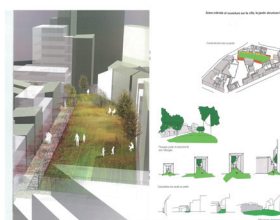


図 47



図 48



図 49

*1: レヴィ=ストロース 『悲しき熱帯』 川田順造 訳 中央公論社, 1977 年

*2: ジークフリート・ギーディオンの『空間・時間・建築』全 2 巻 太田寅 訳 丸善, 1969 年

*3: ハンナ・アーレント 『人間の条件』 志水速雄 訳 中央公論社, 1973 年

*4: 宇沢弘文 『社会的共通資本』(岩波新書) 岩波書店, 2000 年

*5: アトリエ・ワン 『アトリエ・ワン コモナリティーズ——ふるまいの生産』 LIXIL 出版, 2014 年

*6: 乾久美子+東京藝術大学乾久美子研究室 『小さな風景からの学び——さまざまなサービスの表情』 TOTO 出版, 2014 年